

無理なく実行可能で目標を明確にした食育カリキュラムづくりとその評価

教育実践高度化専攻
授業実践リーダーコース
P10026E
林田一成

「研究の背景」

食育基本法（H17 制定）、学習指導要領（H20）において“学校教育における食育の推進”が明示されたことを受け、全国の多くの小学校で、食育の年間カリキュラムが作成された。しかし、実際、カリキュラムに沿った実践を行っている学校は少なく、学校教育における食育を推進する取組は停滞傾向にあると考える。現任校の場合も例外ではなく、現状の食育カリキュラムが実行可能なものになっているか、カリキュラムの目標は明確になっているか調べる必要があると考えた。

「研究の目的」

上記の背景を踏まえ、次のような目的で研究を行うこととした。

- I 現任校で従来行ってきた実践課題を明らかにする。
- II 現任校の実践課題を克服した食育カリキュラムを作成する。
 - ①無理なく実行可能な食育カリキュラム
 - ②目標を明確にした食育カリキュラム
- III 実践を通して評価し、食育カリキュラムの改善プランを持つ。

「研究計画・方法」

目的 I～III に対応し、次のように研究計画を整理した。

- 1 現任校での実践をふり返り、現任校の実践の課題を明確にする。
- 2 1. で明らかになった現任校の実践課題を克服した食育カリキュラムを作成する。
- 3 新たなカリキュラムを評価するための評価の視点を定め、食育カリキュラムを実践・評価し、次年度に向けた改善プランを持つ。

「研究の経緯」

1. 現任校の課題（食育の目的[食育基本法]を踏まえて）

明らかになった課題は次の通りである。

- ①学年段階に応じた食育の学習内容と学習方法が明確でないこと。
- ②児童が確かな力をつけている実感を持っていないこと。
- ③総合的な学習の時間で取り扱う内容が増えているため、今後、総合的な学習の時間を活用した食育の本格的な実践は困難な点が多いこと。

2. 新たなねらいを持った食育カリキュラムの構成

(1) 食育カリキュラムの基本的な考え方と構成の枠組み

学習目標と学習内容の基本的な考え方は、「食育基本法の基本理念に沿う」「体験を重視した構成とする」とし、全学年で共通した年間目標（食べもの、食べ方、体験の3つの大項目に沿った7つの柱）を決定した。

食育の学びに必要とされる学習内容の多くは、各教科の内容として扱われていることを踏まえ、教科の学習を中心に学年ごとのカリキュラム（年間指導計画）を構成した。各学年のカリキュラムの詳細は、学年担当に任せ、無理のない実践と自律的な改善を促すことを基本としたが、体験活動や食べ方の一部（栽培、給食指導）は全学共通の活動と位置づけ、土作り等に全学で取り組んだ。また、食習慣に関わる内容（5・6年家庭科で取り扱う内容）は、低学年から繰り返し学ぶこととした。

(2) 新しいカリキュラムの特徴

① 学年段階に応じ、無理なく食について学べる

各学年各教科の食に関連する単元を7つの柱に沿って抽出・整理して組み込むことで、学年段階に応じて児童が無理なく食について学ぶことができる。

② 「明確になった目標に沿って「食」に関する多様な学びを評価できる

7つの柱と関連させた各単元目標を設定することで、明確な目標に沿った評価が可能になる。

③ 食の総合的な力を育むことができる

①で抽出した単元を栽培や調理等の体験的な活動と関連付けて学ぶことで、食に関する様々な知識をつなぎ、物事を考えることができる力（総合的な力）を育むと考えた。

3. 新しく作成した食育カリキュラムに沿った実践と評価

(1) 第5学年二学期の実践と評価

① 第5学年二学期食育カリキュラムの作成

第5学年二学期では、家庭科「元気な毎日と食べ物」の学習が目標「食べ方について学ぶ」を達成する中核単元と位置づけた。また、この単元で行うごはんのみそ汁の調理と総合的な学習の時間を活用した米づくり等の体験的な活動を関連づけて学ぶことで、食に関して幅広い知識を習得できるカリキュラム構成になると考えた。一方、目標「食べものについて学ぶ」を達成する中核単元は社会科「これからの食料生産」であり、家庭科の学習はこれを補足する単元として位置づけられた。

②家庭科「元気な毎日と食べ物」授業実践

食育カリキュラムに組み込んだ各教科の単元目標は各教科の目標を最優先とし、これに沿った食育の目標を加えて単元計画を作ることを基本とした。大単元・中単元の目標・一時間ごとの目標を整理し、各時の授業では目標の重点化を図って表にまとめた。本単元の食育の目標は、家庭科の目標と重なることから、家庭科の目標と同一型または発展型と位置づけた。学び方に関する自己評価やふり返りの記述から、児童は食について楽しく学び、児童が家庭科や食に関連する基本的な内容を理解し、調理に必要な技能を身に付けたことがわかった。

③第5学年二学期のカリキュラム評価

社会科「これからの食料生産」や総合的な学習の時間「バケツ稲栽培」でのふり返りの記述から、児童は食について楽しく学び、基本的な内容を概ね理解していたことから、第5学年二学期の食育カリキュラムは無理なく実行でき、目標も明確であったと評価した。

(2)他学年の実践と評価（事例：第4学年二学期）

①第4学年二学期食育カリキュラムの作成

第4学年担当教師が作成した食育カリキュラムでは、学級活動「バランスよく食べよう」が目標「食べ方について学ぶ」を達成する単元、また、社会科「けんこうなくらしとまちづくり」が目標「食べものについて学ぶ」を達成する単元と位置づけられていた。

②学級活動「バランスよく食べよう」授業実践

目標に沿って、児童は料理カードを使って食品の組み合わせ方を学習した。担当教師に実践後の気づきを記述してもらい、児童には、授業のふり返りを提出してもらった。児童のふり返りを見ると、目標に沿った記述をした児童数が全体の70%以上であったことや学び方に関する自己評価から、児童は食について楽しく学び、基本的な内容をよく理解したことがわかった。

③第4学年二学期のカリキュラム評価

社会科「けんこうなくらしとまちづくり」においても、児童は食について楽しく学び、基本的な内容を概ね理解していると評価できた。このことから、第4学年二学期の食育カリキュラムは無理なく実行でき、目標も明確であった。

(3)全学年共通の活動評価事例：第2学年二学期

①第2学年二学期全学年共通の活動

第2学年食育カリキュラムでは、生活科が栽培活動の目標を達成する単元であり、学級活動が目標「食べ方について学ぶ」を達成する単元であった。

②全学年共通の実践

全学年で外部専門機関と連携した栽培活動を土づくりから継続的に行ったところ、学年ごとに取り組んだ栽培活動にも意欲的に取り組み、栽培に関する様々な側面に気づ

く児童が増えた。また、重点目標を設定して給食指導を行ったところ、児童は無理なく食べ方について学んでいたが、記述内容を見ると、目標をさらに明確にする必要があることがわかった。

③全学年共通（二学期）のカリキュラム評価

教師のふり返りから、全学年共通の活動は無理なく実践できたと考えられた。また、児童のふり返りを見ると、多くが積極的に取り組んだ様子はいかがえるものの、目標に関連した記述は少ないことから、全学年共通部分の食育カリキュラムは目標をさらに明確にする必要があるとわかった。

(4)学習評価のまとめ[3.(1)~(3)の総括]

実践を通して児童の振り返りの記述が増加し、目標に沿ったものも多く見られるようになった。目標を明確にした食育カリキュラムにより、児童の確かな学びが可能になったと考えられる。

(5)食育カリキュラムの評価

作成した食育カリキュラムは、実践を通して主に次のような点で成果を上げることができたと考える。

- ・各学年各教科の食に関連する単元を7つの柱に沿って、学年段階に応じて児童が無理なく食について学ぶことができた。
- ・7つの柱と関連させた各単元目標を設定することで、明確な目標に沿った評価が可能になった。一部目標が明確でない内容や項目については改善が必要である。
- ・栽培や調理等の体験活動を食育カリキュラムに効率よく組み込むことで、児童が実感を伴いながら学ぶことができた。但し、食に関する様々な知識をつなぎ、物事を考えることができる力を育むことは容易ではなかった。

5. 研究の評価・分析と次年度に向けた改善プラン

I 新しいカリキュラムに沿って現任校の課題を克服した実践ができた。

①無理なく実行できた。

②目標が明確で実感を伴う学びができた。

II 学習目標を達成できていないカリキュラム構成や児童の学習が不十分な点を改善する必要がある。次年度に向けた食育カリキュラムの主な改善点は、次の通りである。

- ・目標の明確化[内容と表記の仕方を改善]
- ・評価の工夫[ふり返り活動のスリム化、学習内容に応じた評価の在り方]
- ・単元構成のバランス[単元数・該当する目標の数]
- ・食べ方について学ぶ学級活動のカリキュラム編成
- ・総合的な力を育むためのふり返り活動の工夫

修学指導教員 長澤 憲保 加藤 明
指導教員 増澤 康男